

「はたらく」は、"不滅"です

「はたらく」は、"不滅"です

日本機関紙協会東京都本部

理事長 矢野政昭
事務局長 大渕俊之

広くとりあげたことです。

最近は、「正義が勝つ」ということが、ほとんどないなかで、沖電気闘争の勝利は、労働運動の方向を明るくし、正しく生きることがいかに大切なかを示唆した画期的なニュースでした。

八年余のたたかいのなかで、勝利の要因はいろいろあるでしょうが、そのひとつに、支援する会の機関紙「はたらく」のはたらき役割があげられます。

沖電気労組や電機労連の支援がないなかで電機産業に働く仲間だけではなく、全国津々浦々の働く仲間にたたかいの支援の輪を広げたのは、まさに「はたらく」であったと思います。

これまで数多くあった争議団のなかで、闘争ニュースやビラとは別に、きちんとした機関紙を発行しつづけたのも、「はたらく」がはじめてではないかと思います。まさに、「機関紙中心のたたかい」を生み出したといえるでしょう。

この「はたらく」で評価できることは次のような点になります。

①毎月一回の定期発行をきちんと守って、全國の読者に届けたことです。

②タブロイド四ページ建の紙面は、ともすれば「闘争ニュース」だけになりがちなところをケツとこらえて、記事の内容をかなり幅

べトナム戦争のこと、三宅島闘争のこと、原発問題、國家秘密法など、総合的な企画で、しかも「足」をつけて記事を書いて仲間に訴えかけたことです。つまり、沖電気の闘争は、全国的な政治、社会問題と深くかかわっていることが、『事実』を通して報道されつけたものです。

③クイズをのせたり、子どもの成長を中心とした家族を登場させたり、マンガで綴ったりなど、だれにでも分り、理解され、支援を広げる「大衆性」もこの「はたらく」はスペースをさいいていることです。

④「はたらく」を中心としながら、ポスター、ビラ、リーフ、パンフなど、そのつど作成された沖電気闘争の宣伝物は、どれだけ洗練されたデザインや技術で、最高水準のものばかりであったと思います。機関紙と宣伝技術がいかに大切かも教えてくれます。

日本機関紙協会東京都本部主催の「機関紙コンクール」でも、いつも「はたらく」は上位入賞をはたしました。これから、みられるくなるのは残念ですが、きっとどこかで「はたらく」の教訓が引きつがれるものと確信しております。「はたらく」は機関紙活動のなかで不滅です。